

E-5 近隣社会に関する主婦の意識調査

ノートルダム清心女大家政 榎並英子

目的 核家族化・都市化の増大に伴い、近隣社会の人間関係の希薄化が問題になっているが、健全なコミュニティの発展、安定した家庭生活にとって近隣社会のもつ役割は重要である。近所づきあいに関する主婦の意識を知り、望ましい近隣関係はいかにあるべきか基礎資料とするために実態調査を行った。

方法 岡山県内の主婦を対象に、地域差をみるため1戸建住宅の多い岡山市内の古い住宅地と公営住宅団地2、倉敷市の職業団地、農村部として専業農家戸数の多い2地域の計4地域を選び、質問紙調査法によって、近所づきあいの程度、きっかけ、必要性に対する意識、満足度など近所づきあいに関する意識と実態について調査した。

結果 「近所」の意識は「向う三軒両隣」と「小字・隣組、同棟内」がほとんどで、年令、居住年数によってその範囲に差がみられ、居住年数が多くなるほど「近所」の範囲は広がっている。「向う三軒両隣」とは団地では同じ階段を利用する7~8戸程度に一致している。つきあいの深さは地域、年令、居住年数に関係なく、予想したよりもかなり円滑に行われており、無関心の主婦は認められず、ある程度住み慣れくると近所づきあいの必要性を感じており、都市部で「困った時にお互に助けあうようなつきあい」ができるようになるまでには、2年程度の居住年数が必要のようである。